

伊勢のごせんぐう

伊勢の伝統文化を伝える

昔の一枚

伊勢の民俗行事

お木曳きひき

500年以上の歴史がある伝統行事「お木曳」。神宮にご用材を運び入れる
労役が、いつしか伊勢の町衆まちしゅうにより町ごとが競い合うような、伊勢ならではの
特別な民俗行事になりました。



川曳(明治時代の様子)



陸曳(大正時代の様子)

明治、大正時代のお木曳

昔、伊勢は神領といわれ、地元に住まう
「神領民」はその役割として神宮へのご奉
仕を行ってきました。中でも式年遷宮に
伴うご用材の運搬作業、550年以上前
から継続されている「お木曳」は、大変な
労働でありながら崇敬の意をもって神領
民の榮譽とされてきました。昨今は1〜3
本の木を積むことが普通ですが、実質的
な運搬を担っていた時代は、一度に何十本
も積んで、その技術を競ったり、必要とあ
れば昼間だけでなく夜曳も行われたり、
期間も長く何か月もかけて行われるな

ど、総出で労をいとわずという時代もあつたとい
います。とはいながらも、江戸時代にはそ
れぞれの飾りや衣装など、町々の個性が発揮さ
れ、ずいぶん華やかなものになっていました。

そして明治時代には、ご遷宮は新政府国家
が行うものとなり神宮独自の用材搬入が進め
られました。が、神領民が願って奉仕の民俗
行事として継続して実施されるようになったと
いう記録があります。当時はまだまだ労役奉
仕の必要性は高く、大正時代の第58回お木曳
は3次(春から夏の期間のみ3年間)に渡り、最
大規模の奉仕となりました。

知っておきたい、伊勢のこと

天皇陛下のご譲位に 平成の時代への感謝

先日、天皇陛下下の譲位
(退位)の御意思を受け、
平成31年4月30日には天
皇陛下のご譲位、5月1日
に皇太子殿下が皇位継承
されること発表されま
した。明治、大正、昭和と、
平成の時代、一番の違いは
他国との戦争がない、その
名の通り「平和の御代」で
あったことではないでしょ
うか。30年の間、様々な事
を乗り越えて、こうして新
しい世を迎えられることは
国民として素直に喜びたい
ものです。

年が明けると譲位即位
の準備が始まります。平
成30年は、平成の御代に感
謝し、次代へ、日本の未来へ
とつなげていく節目の年。
日本中にお祝いの気運が高
まるかつてない機会です。
内宮に祀られている天
照大御神は皇祖神といわ
れ皇室の最初の祖先とさ
れているのは、ご承知の通り

神話の時代から現代まで続く日本文化の伝承

です。天皇即位式の後、初
めて行われる11月23日の新
嘗祭たひじょうさいとして、皇
居に設えられた御神殿にて
一代に二度限りの儀式が行
われます。その祭儀を終え
て、数日後、「ご親謁しんえつの儀」の
ために、天皇陛下として初
めての神宮ご親拝しんぱいとなるこ
とがこれまでの記録から伺
えます。平成2年今上天皇
ご親拝の際、伊勢のまちで
お迎えしたことをご記憶さ
れている方も多いのではない
でしょうか。

瑞穂の国・日本の歴史と 伊勢の神宮のお祭り

建国以来、万世一系の天
皇が即位される他国に例の
ない歴史を持つ日本。神話
として語られる時代から現
代まで途絶える事なく国

が続いています。皇室と神
宮とのつながりは、ただ、皇
祖神であるからということ
ではありません。代々、天皇
陛下はご自身で、宮中にお
いて祭典等を行い、神宮の
お祭りと同じように神恩
を感謝し、国の安寧、国民の
幸福を祈ることを重要なお
つとめとされています。

天孫降臨の神話では歴代
天皇陛下に継承される「三
種の神器」とともに天照大
御神から「稲穂」が託され
たとされています。米をつ
くる暮らしが、この国の繁
栄と平和をもたらすとの
教えからはじまり、お米を
命の糧として国を建て、稲
作を営み、神々を祀り豊作
を願いました。毎年神嘗祭
には陛下ご自身が皇居で作
られた御初穂も神宮に奉

平成の最後の年に 伊勢の民として感謝を

伊勢は、神領とされてい
た時代はもちろん、ご鎮座
以来、神宮の歴史とともに
歩んできたまち。この地に
生きる人々は、日常的に、ま
た遷宮行事などを通じ神
宮から多くのことを学び、
身近に感じさせていただけ
てきました。

神恩感謝の言葉通り、時
代が変わろうとしている今、
この伊勢だからこそ、平成
に生きた民として感謝の心
を表したいものです。

伊勢に生きて、新しい御代みよを迎えられる喜び

平成三十年は感謝の年に。





初穂曳 (陸曳)



「お木曳」「お白石持」という、ご遷宮に関わる民俗行事を伝承し、また神嘗奉祝の主軸として行われている「初穂曳」。外宮領・陸曳は、神宮の奉曳車を使い伊勢神宮奉仕会青年部が運営実務を行っています。

今年も三台の奉曳車には「お木」・「樽」・「米俵」が積み、お初穂が飾られた。16日の内宮領・川曳もあいにくの雨模様で寒い一日でしたが、今年も長峰連合奉獻団が運行を担当、無事内宮へ奉納されました。

第46回 初穂曳

伊勢の民俗行事を次世代につなぐ初穂曳。外宮・陸曳では、三台の奉曳車に初穂を積んで、子どもたち、大学生、伊勢の町の若い衆にも参加していただいています。



初穂曳 (川曳)



15日/全国各地からのお祭り踊り連がひとつになる神嘗奉祝祭ならではの「総踊り」(大通り会場)

十月十四日(土)・十五日(日)・十六日(月) かんなめほうしゅくさい 神嘗奉祝祭 報告



神宮の神嘗祭とともに祝い、収穫の喜びと五穀豊稔の感謝を分かち合う神嘗奉祝祭。伊勢だけの行事ではなく「祭のまつり」として日本各地から著名なお祭りが伊勢に集い、神宮への感謝の想いを込めて、踊りや舞いなどを奉ります。各地で伝統芸能、文化を守り継ぐ18団体が来勢しました。前夜祭は土曜日の夜ということもあり、サンアリーナ会場も大盛況、華やかな饗宴となりました。15日外宮前は、あいにくの小雨模様でしたが、観光の方をはじめ、多くの観客に足を運んでいただいております。演者の皆さんには無理のない範囲でご披露いただきました。すべての演目が終了した後、各団体揃って、それぞれ地元から携えてきた一握りのお米をもつて外宮へ参拝し、ご奉納されました。

14日/サンアリーナでの前夜祭のようす



第17回 神嘗奉祝祭「祭のまつり」

伊勢へ集い、みんなで祝い。雨の中でも笑顔いっぱいのお祭り

神嘗祭をお祝いする伊勢のお祭り「神嘗奉祝祭」。日本各地の著名なお祭りが例年これだけ揃うのも「お伊勢さん」だからこそ。ご参加ご協力いただきました方々に感謝申し上げます。



田植え (4月29日)



稲刈り (8月27日)



奉納のための稲束作り



奉曳車に米俵など荷積み

伊勢神宮奉仕会青年部では初穂曳を次世代へつなげていくために、できる限り青年層が中心となつて、奉曳の技術を研鑽していきます。またその一環として、初穂曳で奉納するお米づくりも毎年行っています。

初穂曳に曳き手として出る子どもたちも、田植え、稲刈、奉納まで経験していただいています。収穫した稲穂を整え奉納する稲束をつくるなどの準備作業もすべて奉仕会青年部と、たくさんの方の元協力団体が行っています。



初穂曳 (川曳)

Q

初穂曳はいつからはじまったの？

4年後(2021年)には第50回を迎えます。初穂の奉納行事はそれ以前からありましたが、伊勢市民が参加でき、大祭りの核となる行事に、という思いと民俗行事「お木曳行事」「お白石持行事」の伝統継承という意義を踏まえ昭和47年から行われています。以来、実施母体等の移行や、大祭りが土曜・日曜の開催になるなどの変動はありましたが、今年の第46回まで初穂曳は例年10月15日16日に実施されてきました。事前申込をすれば、伊勢市民はもちろん、市外の方も特別神領民として奉曳にご参加いただけます。



お初穂を外宮へ奉納